

# みかん

岡 セツ子

出張先から疲れた体を引きずるように漸く家に戻った僕に、妻の由美子は、待ってましたとばかり、矢継ぎ早に、家政婦を頼んだことの弁解をした。

由美子は、一年前に双子の娘を出産していた。が、出張ばかりで殆ど留守がちの僕には自分の分身という実感がなかった。名前も、僕の希望を無視して、留守中に妻の両親が藍と里香に決めていた。なんだか、僕は気に入らないのだが……

一年目の誕生日に、会社には妻の具合が悪いからとウソまでついて、早退して飛んで帰ったにもかかわらず、双子の娘はまるで、他人を見るような目つきではにかむばかり。妻のひざを離れようとしなかった。

それでも、誕生祝は、有能なパパを演じきった僕だ。

妻の由美子は、その双子の面倒が見切れないから、週に三日でも家政婦を雇いたい、と以前から言っていたことを実行したのだ、とまくし立てた。

「いくらかかるんだ、僕は聞いてないよ」

「何言ってるの、貴方の子供でしょ」

「どれぐらいかかるのかって聞いているんだよ」

僕も少々怒っていた。妻の職業は、今や専業主婦だ。結婚前まで、音大のピアノ科を出て、しばらく音楽教室で教えていたのだが。おまけに、実家の母に何かといえば来て貰っているくせにと、不満は喉もとまででかかっていたが、帰ってきたばかりで、喧嘩をかうなんて……と、僕は口をつぐんだ。

和歌山から出てきたという家政婦会から派遣された、森本ひとみという娘が、どんな女の子か、僕が知らないまま、妻の由美子は、彼女を雇い、上機嫌な月日が過ぎた。

ある日、僕が帰宅したとき、玄関まで出迎えに来たのは妻ではなく、家政婦だった。

僕はいつもの習慣で、誰の顔を見るでもなく、

「ただいま」と、パソコンの入ったケースを手渡そうと思って目を上げた。と  
その時、

「あっ！」

「あっ！」

驚きの声を上げたのは、僕より早く森本ひとみだった。

「えっ？…君…あの時の、あの新幹線の中で…」しばし、お互いに素っ頓狂な声をかけあった。

あれは、一年程前、出張の帰り、新大阪駅のプラットホームで見た小さな出来事だった。僕がリザーブしてあった指定席にその野暮ったい少女が座っていた。

「おい、ココ僕の席なんだけれど」

「は？ すみませんちよつとほんの少し、すみません…」と。

目を上げた少女は泣いていたらしい。窓の外には、少年が少女を見ていた。弟だろうか？ たった一人で、見送りに来ているのか少年の目にも涙が光っていた。

「まあいいよ。君の弟？」と。

僕の問いに、少女は僅かにうなずいただけだった。強引に席を替われとはとてもいえなかったのだ。新幹線がすべるように動き出してあつという間にプラットホームが流れていく。窓ガラスにほつぺたをくっつけて、少女は、弟の姿を追っているようだったが、もはやその姿は消えていた。無常な速さで大阪の町が数十本の線になって飛んでいく。

僕は、ちらりと少女の顔を覗き込んだが、ひぎに置かれた袋の中のみかんに、大粒の涙が、ポトポト音も立てずに落ちていた。

僕は、今時、こんな湿っぽい旅立ちが存在するのだろうか、少女の横顔をぬすみ見ながら、あらぬ想像をしていた。

たとえば、両親が離婚して、それぞれ母親と父親にひきとられていくとか、たとえば、施設で育った兄弟が里親に出される、その別れの見送りとか。たとえば、腹違いの兄弟が、親の目を盗んで合っている…とか。

それにしても、時代錯誤のセンスの悪い服装。ジーンズに囚人服のような縞模様のTシャツ。品のないピンク色のスニーカー。スーパーの景品でもらったような、薄いビニールのトートバッグ一つ。弟から？（僕の妄想の中ではたぶん弟）プラットフォームで受け取った、茶色の袋から数個のみかんのぞいていた。荷物はこれだけだろうか？ 新幹線の中と外で、互いに涙を流すなんて。

これから都会に出て、何をやる？

所詮、スナックか、○○倶楽部とか、風俗営業とか、金払いの良い仕事をみつけてよごれていくんだろう。頭の切れる娘には見えないもんな。そんな悲惨な彼女の将来しか想像することが出来なかった僕の空想も、貧相なもんだと苦笑していたのだ。

京都を出ると、次は名古屋だったが少女は降りる様子がない。少女は見知らぬ中年のオジサンの僕に警戒しているのか、黙って窓の外に目をやっていた。

「あの子。君の弟君？いくつ？ 君の年、聞いてもいいかな？」しかし、彼女は何も答えず、僕にみかんを一つ手渡した。

結局、何もしゃべらなかつた。

東京駅に着くと、お互いチラリと目を合わせて

「みかんありがとう」と僕。

「座席、ありがとうごさいました」と言って別れた。それだけだった。

その時の娘が、偶然我が家に家政婦としてきたのだから、まったく驚かずにはいられない。お互い見るなり、素っ頓狂な声を掛け合ったのも、そのせいだった。

しかし僕の想像力は、当たらずともとうからずで、妻の由美子のはなしによると、森本ひとみの身の上は、両親と弟と四人暮らしで、みかん畑の農家育ち。みかんの木の剪定をしている時、父親が、脚立が折れ、落ちた弾みで持っていた剪定ばさみが胸に刺さり、突然死んでしまったという事だった。後は、僕が想像したとおり、弟は母親の許に残り、自分が働きに東京に来たという。が、家政婦という地味な仕事についたということが、僕には、ちよっとうれしかった。あんがいすっかりした娘であるらしいと、安堵したのだ。

純朴で、ひたむきなひとみは、あの新大阪駅のプラットホームで、弟と涙を流し

ていた姿を裏切るものではなく、僕は甘いみかんの味が思い出されたのだった。

僕の双子の娘たちも直にひとみについて、妻の由美子も上機嫌、再び、好きなピアノにも向くようになっていた。平和な日々がしばらく続いたある日、

「貴方、最近帰宅が早くなったわね」と妻がいう。

森本ひとみが来るようになってから、確かに僕の帰宅が無意識に早くなった。妻はその理由を意味ありげに言う。その上、その頃僕は妻に、彼女を通いでなく住み込みにしたら？と提案していたのだ。僕はひとみの作る薄味の郷土料理が気に入っていた。

「なぜなの？ あなた。あんなに家政婦を雇うこと反対だったのに……」と妻。

「なかなかいい子じゃないか。安心したからさ」と、妻の視線を避けて言った僕。

「ひとみちゃん、最近うっすら化粧してくるのよ……先輩たちに教えられるんだって」

「へ……いいじゃないか。若いんだから」

「結構、よく見ると、いい顔立ちしているのよね」と妻は言う。

実は、僕もそれには、ずっと前から気付いていたのだ。が

「へ〜じっくり見たことないから、」とうそぶく僕。

「でも、住み込みは反対ですからね」と、妻は捨て台詞をはいて部屋を出て行った。

僕の上着のポケットに、妻にも買ったことのないデオールの口紅が手に触れた。それは、あの新大阪駅の湿っぽい別れの情景、袋からのぞいていたみかんの香りと、音も無く落ちていた涙が、僕の脳裏からはなれなくて、何かご褒美を上げたくなっていただけだ。

しかし、僕は妻の視線が気になって、結局、デオールの口紅がひとみの手に渡ることはなかった。

## 甘いみかん

数年が過ぎ、僕は森本ひとみのために、駅前に小さなアパートの一部屋を借りて

やった。借りてやったというより、僕のために借りたようなもんだ。もちろん妻には内緒だった。

毎週金曜日の夜、ひとみの手料理で、僕は夕食を済ませて帰宅するようになっていた。

当然のように僕たちは、男と女の関係になった。そして、我が家には新しく家政婦会から中年のおばさんが派遣されてきた。ひとみは、自分から妻の由美子に

「やめさせていただきたいんです」といったそうだ。

丁度双子の娘を、マリア幼稚園に入園させることに夢中な妻は、「お受験」運動でほとんど、僕には注意を払わなかった。それを良いことに、僕はひとみのはちきれる若さにのめりこんでいった。が、愛情かと問われると、自分でも解からない。会話らしい会話もなく、僕が一方的に、彼女の聞き役になっていた。当たり前だ。年の差は二十年はあった。

金曜日の夜、僕のために用意する夕食の料理についてひとみは雄弁だった。

彼女も僕のために喜んで料理をつくっていてくれていたのだ。絶対にそうだった、と思っっている。

どどここのスーパーが安いとか、品がよいとか。材料が新しいとか……魚は、駅前の方が良いとか、なんとか……

あるとき、僕は気がついた。

「イタリア料理のコツは、オリーブオイルと、にんにくなのよ」とうきうき言うひとみ。確かに、料理の腕前はぐんぐん上がっていた。それにしても、薄味の郷土料理が得意だったひとみが、急にイタリアンとか、フレンチに代わっていったこと、そのとき僕は気にも止めていなかった。僕は、イタリア料理なんかより、フランス料理なんかより、早くベッドに行きたかったのが正直なところだ。今思うと、妻の由美子に気付かれていないという自信も、間抜けた話だったのだ。

ひとみは家政婦会をやめ、ガソリンスタンドで働いていた。僕は金曜の夜しか行かないし、部屋代は僕の負担だったが、生活費も小額しか渡していないのだから、働きに出るのは当前だ。が、ひとみは一度として、何も要求しなかったし、愚痴も言わなかった。

双子の娘が、マリア幼稚園に入学が決まって、入園式には、おじいちゃん、おばあちゃん、妻と僕、一家総出で参加した。ファミリアで二人におそろいのスカートを買ってくれたのは、由美子の母だ。その赤いチェックのスカートに制服の紺色の上着、愛らしい娘の姿に、僕だってデレデレのパパだったのだ。

入園式の後は、六人にぎやかに、レストランで食事をした。二人の娘はトマトソースの一杯かかったスパゲティを注文し、大人たちもそれに習った。が、僕はもうイタリアンにはうんざりしていた。妻が

「あなた、食傷気味なの？」と何気なく言った。僕はギクツとした。

僕はパパとして、愛妻家として、有能だったはずだ。金曜日の晩、ひとみと体を重ねた後、帰宅すると、妻への優しさは格別だったはずだ。後ろめたさが無かったといったら、ウソになる。休日には、風呂場の掃除、娘達へのサービスも怠らなかつた僕だ。しかし、僕の神経は常にピリピリしていた。

ある日

「和歌山のひとみちゃんの実家から早稲のみかんを送ってきたわ」と妻が、帰宅した僕に告げたとき、心臓が止まるかと思つた。

「なぜ今頃、もう我が家の家政婦をやめてから数年たつのに、みかんを送ってくるなんて」と、僕はとぼけた。

ところが妻は、

「ひとみちゃん、近じか、結婚するんだって……お手紙が入っていたの。それがね、出来ちゃった結婚なんだってよ」という。

「えっ？」……

もう僕の不安は、破裂しそうだった。全身から血の気が引いた。

(出来ちゃった結婚) まさか、ひとみのヤツ、

(貴方の子供なんだから、結婚して)なんていいだすのではないだろうな。

今すぐ、ひとみに会わなくちゃ。なぜ、妻に、そんなこというのだろう。僕は何も聞いていない。妊娠したなんて、聞いてないぞ。まさか！ なんてこつた。

出来ちゃった結婚？ 僕と？

そんなバカな。(離婚して!)なんていいだすのだろうか……

妻の視線を避けながら、風呂場に駆け込むと、僕はイライラと、回想したり、計算したりした。そんなはずは絶対無い。うそだ。が、もしかして……まさか。

本当に間抜けな僕だ。絶対ウソだ！

次の金曜日、僕はひとみのアパートへは行けなかった。このまま出来ることなら、自然消滅させたい。どうすれば、説得させられるんだろうと、しばらく考えたかった。が、のんびりしていると、僕の家には押しかけてくるかもしれない。その前に何とか彼女を説得しなきゃ。病院に連れて行かなきゃ。早くしなきゃ。妻に知られる前に。何とかしなきゃ。と気持ちばかりあせって、しかし、なかなかひとみに会う勇気がもてないまま、二週間が過ぎた。意を決して、アパートへ行って見た。するとひとみの部屋は明かりが消えている。ブザーを押しても返事がない。どうしたのだろうか？ まさか、僕の家に行っているとか、それとも、実家に帰った？ 子供を生むために？ まさか。それとも、勤めからまだ戻っていないのだろうか？ そうだ、ガソリンスタンドへ行って見ようか……僕の不安は最高頂に達した。あんまり何度もブザーを鳴らすものだから、管理人が二階に上がってきた。

「森本さんでしたら、先週引越されましたよ」

「えっ？」

「結婚するんだって。彼氏が来て、仲良く引越しの手伝いをしていましたよ」

僕は、風船がちぢむように、一度に力がぬけて、その場にしゃがみこんだ。なんてこった。あいつ。僕の目を盗んで、彼氏なんてつくって。バカにしゃがって……が、次の瞬間、なんて間抜けな僕なんだ。どこまでお人よしなんだ。若いひとみに、若い彼が出来ない方が不思議ではないか。男は自分だけだと信じていた僕が間抜けだ。

「お父さん、大丈夫ですか？ わかりますよ。娘が結婚……反対だったんですね？」と、管理人。

「いや・いや・そうじゃない」……（僕が父親？ひとみの父親？）

そう見えるのか……父親に。確かに親子でも不思議はないか……なんてバカな僕な

んだ。やりきれない気持ちで、膝がガクガクし、腰が抜けたように気が滅入った。「今、賃貸解約の書類持ってきますから」と、管理人は急いで階段を降りていった。

体が小刻みに震え、一人駅に向かって歩いてたが、このまま家に帰るにはあまりにも惨めだった。改札口のすぐ前に、飲み屋があり、気が付くとカウンターに腰掛けでいた。冷酒を注文し、一気に飲み干した。もう一杯、もう一杯。目の前にひとみの顔がぼんやり見え隠れした。僕のひとみ……なぜだ？

頭の芯だけが冴えてきたと思ったら、腹が立つてきた。僕はなんと間抜けなんだ、あんな小娘にしてやられるなんて。あの部屋の冷蔵庫だって、電子レンジだって、僕が買ってやったんじゃないか。いらないうっていったけど、洗濯機だって、そろえてやったじゃないか。窓にかかったピンクのカーテンだって、それに、セミダブルのベットだって……えっ？ あのベット……僕のベット。

二人の大切なあの場で、僕以外の男とも……あのひとみが？……畜生！畜生！そんなことって、あるかよ……

バカヤロウ……ウソだろ？　ひとみ、うそだといってくれ。

怒り狂った気を静めるのに、僕はどれだけ飲んでも治まらなかった。

翌朝目を覚ますと、僕は居間のソファアの上で服を着たまま寝ていた。この体たらくを妻の由美子は、どう見たのだろうか。ふっとそれに気付くと、一度で酔いが引いた。あわてて、風呂場へ駆け込んで、シャワーを頭からザブザブかぶった。頭がガンガンしていた。時計を見ると六時を少し過ぎていた。

あれから、僕はもう有能なパパを演じることは出来なかった。針の筵のような僕の大切な家、娘達の弾んだ笑い声も、妻の弾くピアノの音も、はるか遠い、別世界からエコーがかかったように、耳をなでるだけだった。

妻は僕に何も言わない。何も問いたださない。いつものように、朝の食事を僕の前用意し、二人の娘たちと、全く変わらず、楽しげに会話をしているのだ。せめて、笑ってくれ。間抜けな僕を笑ってくれ。が、何も言わなかった。不気味なほど。

それとも、妻は何も知らない？　それとも、それとも、それだけ僕を無視してい

るんだらうか……

和歌山のひとみの実家から、またみかんが送られてきてたのは、クリスマス間近かな頃だった。

居間のテーブルの上に、みかんの籠が鎮座していた。

「ひとみちゃんのお母さん、律儀ね、毎年送ってくださって、貴方も食べたら？」と妻はみかんの入った籠を、僕の前に押しすすめた。

### みかんのとげ

結局、妻は、何も疑いもせず、僕の浮気に気付もしなかった。このまま、僕のひとみに対する怒りさえ収まれば、全ては過去のことになるんだらうか。それとも、由美子はそれほど、僕に興味がないということか？

いずれにしろ、僕の頭の中から、この一件が過ぎ去るまで、気が狂ったように僕は会社人間になった。うさん臭いと思っていた部長にも、忠実に頭を下げ、出張も自ら進んで引き受けたのは、妻の視線を避けたかったのだ。

すすんでどこへでもセールスに出かけたし、その足で社にとんぼ返りし、残業もした。

僕の勤め先は、大手楽器メーカーだったが、僕自身は音楽には全く興味がなく、弾くことも歌うことも出来ず、電気に強いだけだった。つまり電子楽器の販売部だ。

大学では電気工学を専攻したのだから、当たり前ではあるが、実は、大手の家電メーカーの就職には、何度か落ちていたのだ。電子楽器販売部と言うのは、本当は不本意だった。が、とりあえず、安定していた。

ホテルの屋上に建てられた、結婚式専用のチャペルに、パイプオルガンもどきの電子オルガンを設置したり、披露宴会場に、電子ピアノ、キーボードなどを売り込む。また、中学や、高校の吹奏楽部に出向き、管楽器のセールスもしていた。

クラシック音楽一辺倒の妻は、娘たちには、絶対電子ピアノは使わせないといきまいているが、僕にはその音色の差は聞き分けられなかった。由美子だって、本当に聞き分けられているのか怪しいもんだ。それでも僕は、

「音色や音量を自由に加工できるから、音楽表現の幅は、従来のピアノには絶対出せないですよ」と、利点ばかりをお客様相手に熱心に語った。

もし、「弾いてみてください」といわれたら、たった一曲だけ。身の縮む思いをしていた。が、僕の饒舌さが、その間を与えなかった。それで僕の販売成績は、どんどん上がっていった。

ひとみの失踪が、どうして僕の心をこれだけ乱したのか考え、それにしても、なぜ僕に一言の挨拶もなく、突然姿を消したのか。

もし、ひとみが正直に、「好きな人が出来たの」といったら、僕は何といたただろうか？ 嫉妬に狂ったのだろうか？と、自問していた。

僕にとって、一番大切なのは家族のはずなのに、なぜかひとみのことばかりが気になった。「出来ちゃった結婚？」相手はどここの誰なんだ。いつどこで知り合ったんだ？ ガソリンスタンドの人か？

いや、薄味の郷土料理がイタリアンやフレンチに代わっていったのは、その男のためだったのだろうか？ そんなはずはない。いくら僕だってそこまで間抜けではないぞ！ 僕以外に恋人がいたなんて。僕はひとみのどこに執着していたんだろう？ 愛情？…やっぱりある種の愛情だろうか？ はちきれするような若さに、のめり込んだだけではあるまい。僕はまだそこまで老いぼれでは無いぞ。

それは、ひとみの前では、有能なパパを演じなくてすんだからだろうか？ 確かに、たわいもないひとみのおしゃべりが、一週間の疲れを取り除いてくれる子守唄のようだった。あいつは、そこに居るだけでよかったのだ。僕の全身から全てを拭い去ってくれるような安堵感があつた。

僕の大切な家族。確かに大切な家族。その家族を僕は裏切ったことになるのだろうか？ 多分、そうなのだ。

何かというとパパは、全ての責任を取らされた。おねだりはいつもパパ、パパと。しかしそれが、僕の幸せというものだったはずだ。

ひとみは、一切おねだりはしなかったし、一銭の金も自分からは要求しなかつ

た。なぜ突然姿を消したかを詮索すると、やっぱり、結婚という安泰な場所、有能なパパが欲しくなった、ということだろうか。誰かに縛り付けて欲しくなったのだろうか。それが、女というものなのだろうか？

うだうだと、ひとみの心中を慮っていると、小麦色のスベスベの彼女の肌が、無性に恋しくなった。手のひらを広げると汗がにじんでいた。この両手でひとみの体を愛撫したのだ。あの、濃密な金曜日の夜を、過ごしたのだと。たまらなくひとみに会いたいと思った。そして、本音を聞きたい。そうでもしないと、いつまでもこの迷路から僕は、抜け出せない気がした。やっぱりある種の身勝手な愛情だった。

### すっぱいみかん

それから僕は、一番大切な家庭で、ブユに刺されたときみたいに、痛痒い失態ばかり繰り返していた。

たとえば、二人の娘の小学校の運動会で、父兄と子供と二人三脚をしたとき、自分が夢中になって走った結果、娘の足をもつれさせてころばせたこと。周りからいっせいに笑いが起こった。

たとえば、娘たちのピアノの発表会で、会場がわからなくて遅刻をし、下の娘の演奏が終わっていたこと。

たとえば、双子の誕生日を一ヶ月間違えて、ケーキを買って帰ったり。

たとえば、結婚記念日に、ピザを食べたいという妻に、お好み焼き屋へ連れて行ったり。

「日本のピザはこれだよ」という僕に

「もういや！ パパったら」

「そうだよ、パパださいよ」と、三人の女から攻撃される、といった具合だ。

なにしろ、おばあちゃんも加えると、女四人に、男は気の弱いおじいちゃんと僕。

それが僕の、世界で一番居心地悪い、世界で一番大切な、家族だった。

そして、相変わらず、年の瀬に、ひとみの実家からみかんの箱が送られてきていた。忘れかけたひとみを思い出すのは、和歌山みかんを見た時だけになった。そ



妻の由美子が、

「あら、ひとみちゃんからよ、」といって、一通の年賀状を僕の前に置いたのはいつの正月だったか。それは、家族そろった写真つきの年賀状だった。

山脇 弘二、妻 ひとみ、長男 充弘 長女 弘美と。

かなり元気そうな、健康的な家族写真。立派な長男、ミツヒロ…… 充弘？

「ひとみちゃんも、立派なお母さんになって。円満そうな家族じゃない？」と由美子が独り言のように言った。

充……僕と同じ字を使っている長男。父親が弘二なんだから、弘はわからないでもない。でも、ミツヒロの充は、この字なんだ？ 僕と一緒に。

きつと優しい子になるぞ。僕は偶然自分と同じ字を見て、ニタリと笑った。

その時、やはりいつものように、テーブルの上にはみかんの入った籠が置かれていた。和歌山のみかん。その時のみかんの味は、ちよっぴり、すっぱかった。

娘たちが、女子大を卒業するころ、神戸に支店が出来ることになり、軌道に乗るまでの間、僕は企画部長として神戸に赴任した。

妻の由美子は沢山のピアノの生徒を抱えているからといって東京に残った。つまり単身赴任だ。この年齢で、一人暮らしはきついか？と思ったのは、ほんの数日。とんでもなく快適で、開放感がある、充実した日々だった。

新宿のビルの谷間にあった本社から、神戸に来て見ると、信じられないほど人が少ない。海と山に挟まれた、ほんのり塩と油のにおいがする温暖な港街。イラ付いた厳しさを感じさせないのが、僕の肌には実に心地よかった。大地震があったことなど、まったく感じさせない。

しばしの独身生活に、毎晩、赤提灯の灯るのれんをくぐり、税金を払って楽しんでいた。この穏やかな気質の神戸で、商売のほうは、なかなか思うように成績は上がらなかったものの、元来、ノー天気な僕は気にしなかった。娘たちが自立するの、まじかだし、妻は妻で、忙しくしているし、若返ったように、ルンルン、定

年までの数年を過ごせばよいと考えていた。

「あなた、和歌山のひとみちゃん、忘れてないでしょうね？ 息子さんがね、みかん農園を継ぐことになって、この秋、結婚するんだって。披露宴に出てくれない？ 招待されているのよ。神戸のほうが近いんですもの」と妻の由美子から電話があった。

「なんで、僕が、出席しなきゃならないんだよ」

「だって、毎年律儀にみかんを送ってくれているんですもの」と妻。

「そんなの、向こうが送ってくるだけだろ、勝手にさ、昔のことだろ……」

「……そんなこといいってもいいの？ 毎年必ずなのよ……みかん届くの……」

「それがなんだよ。みかんだろ？ ただのみかん」

「そんなこといわないで、和歌山に足を伸ばすのも、いいじゃない？」と由美子は執拗に食い下がる。

「お願いよ……招待状送るから。出席と出しておくわよ」といったと思ったら電話が切れた。

ひとみの息子が結婚かあ……早いなあ……へえ、ひとみがね。あのひとみの息子がね……どんな、おばさんになっっているのか、懐かしいな……が、そんなところに、僕が出席？ 由美子はやっぱり気づかなかったんだな……どっちにしても、昔々のその昔のことだ。あってみるのも悪くないか……と僕は思った。  
そして、その年の秋、十月十日……和歌山へ出かけていった。

## みかん畑

山脇の長男が結婚するからって、何で僕が披露宴に出るんだ？……ひとみは、もう過去のこと……会ったらどんな挨拶を交わせばいいんだ？……ダンナの前で……と、不満ダラダラ、文句ブツブツ秘めながら、和歌山駅を降り立った。

神戸とはまったく違ったのどかさがある駅前。共通はほのかに塩の香りが漂っていることぐらいだ。タクシーに乗って、和歌山城近くの結婚式場へ向かった。

披露宴は五十名ばかりのささやかなものだったが、その分、新郎新婦の家族、友人知人、来客の一人一人の顔が、隅々までよく見えた。僕の席は、一番末尾の丸テーブルで、その他大勢、といった雰囲気、見知らぬ人々の間に座らされた。同席の人とは、お互いに軽く会釈した以外、ほとんど口もきかない。まったく、居心地の悪いもんだった。場違いな僕には、少々アルコールが入っても、碎ける空気はまったく吹かなかった。大しておいしくもない料理を、機械的に口に入れるだけの僕。黙々と箸だけが動いている感じ。ふと、ひとみはどこにいるのか……と思った。

「新郎の両親だから、あそこだよな」と正面を見たが、それらしき姿はない。

でっぷりと太った和服の女性が、うつむき加減に立っていて、その脇に、恰幅の良い男が……あれが、新郎の両親だな？ と僕は思ったが、そこにひとみはいない。

一瞬、僕は、場所を間違えたのではないかと不安になったほどだ。が、席には僕の名前、あつたもんな。やっぱりここだ。とまた、もくもくと、食べるだけだった。

宴たけなわになり、友人たちの、お祝いの悪ふざけがあつて、新郎新婦が、各テーブルに挨拶廻りを始めた。新郎山脇充弘君と新婦恵美さんが僕たちのテーブルにやってきた。新郎の顔を見て、やっぱりひとみにどこか似ているなあと、感慨深く僕は眺めていた。この若い夫婦が、みかん畑の後継者となつて「みかん農園」を盛りたてていくのか。また、ずくつと、僕の家のみかんが送られてくるのだろうか……と思つて。

披露宴が終わつて、出口に並んでいた新郎新婦と山脇家の両親をしげしげと見ると、あのでっぷり太った和服の女性が、なんとひとみだったのだ。声も出ないほど驚いた。彼女は何も、一言も発せず、僕に深々と頭を下げただけだった。

あの、数年間、金曜日の夜とともに過ごしたひとみの面影は全くなかった。が、年月の重みが、たくましい母親という衣をまとつた、でっぷりと太ったひとみに育て上げたのだろう。僕は、ひどくうろたえてしまった。

僕よりはるかに、立派な風格があり、それなりの美しさ、中年の落ち着き、自信というものが輝いて見えたのだった。

神戸に戻ると、何事もなかったように、普段の生活にもどり、仕事に追われる

日々が続いた。妻の由美子にも電話一つ入れなかった。押しも押されもしない、ひとみの母親ぶりに、時の流れというものを感じさせられただけだ。きつと、我妻も、僕より先に、甘味も苦味も、たつぷり味わって、人生の贅肉を蓄え、きつと、不器用な僕を、手のひらに乗せて、コロコロ転がしているんだろなあ、と思ったものだ。

「あなた、和歌山には行ってくれたの？ 結婚披露宴よ……」と、妻の由美子から電話がかかってきたのは、それから数日たってからだ。

「ああ、行ったよ」と、僕はぶっきらぼうに言う。

「それで？ どうだったの？ ちゃんと報告してよね」と妻。

「ああ、悪かった、ひとみちゃん、でっぷり太ってさ、貫禄の中年になってた」

「当たり前じゃない……それで？」妻の声がトゲのように突き刺さった。

「それだけだよ。知らない人ばかりでさ……居心地悪かったよ」

「そんなことでなくて……充弘君は？ あなたの息子のミ・ツ・ヒ・ロ・」

「えっ？ 今、なんていった？」……電話が、プツリと切れた。

「えっ？ なんだって……」

僕は呆然と受話器を置いた。

二人の女の間でどんな密約が交わされていたというのだ……